

Title	実存分析的視点による生き方態度の発達的研究 : 実存的生き方態度インベントリー(EAL)による検討
Author(s)	高井, 範子
Citation	大阪大学教育学年報. 1999, 4, p. 101-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3599
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

実存分析的視点による生き方態度の発達的研究

—実存的生き方態度インベントリー (EAL) による検討—

高井 範子

【要旨】

Franklの実存分析理論に基づいて作成した新尺度「実存的生き方態度インベントリー (EAL)」を用いて、大学生および成人男女合計1695名(M687名、F1008名：大学生から70代以上の計7つの年齢群)を対象に生き方態度の発達の変化の検討を行った。さらに、PIL、自己受容、自尊感情(self-esteem)の視点を加え、EALとの関連による検討をも行った。その結果、EALから抽出された4因子「自律性・主体性の側面：決断性・責任性・独自性」「自己の存在価値」「自己課題性」「意味志向性」の各領域は加齢に伴って得点が増加する傾向にあり、40代、50代、60代の女性の年齢段階別の得点に有意差が見られたものが多かった。性差については「自己の存在価値」、「意味志向性」は女性の方が男性よりも有意に得点が高かった。また、EALの「自己課題性」はPILと強い関連を示しており、人生に意味や目標を見出し活気に満ちて生活している人は、自ら進んで自分のなすべき課題や目標を見つけようとし、日々人生を充実させる努力をしている様子が窺えた。さらに、「自己の存在価値意識」は自己受容や自尊感情と関連があり、人生に意味を見出したり、日々の生活の活気や充実感にもつながっていくことを示唆する結果であった。

1. はじめに

価値観の多様化の中で、自己の拠って立つ精神的基盤を失うところから発生する病理現象も増加し、人生に対して生きる意味や価値を見出せず無気力な生活を送る人々も多い。Frankl(1969)は自分の人生に独自性の感覚を与える意味や目的を見出せないときに実存的空虚を経験するとしている。児童・思春期の精神科臨床医の服部(1998)は、近年、思春期の若者によほど「疲労感」や「うつ感情」が前面に強く出ていると指摘している。生きる力の火種が弱小化しているという。服部(1998)は、火種は自己を愛し、自己に価値を見出す自己意識と、他者の存在を認め、他者と共に生きる味わいを大切にすると対人感情がその中核にあるのではないかとしている。もし親や教師に、自分の持つ最も本質的なもの(気質や個性)を認められ、愛されるならば、子供は「自分には自分なりに価値がある」と自己を信じ、自己をいとおしく思う火種がともされるであろう。また、様々な年齢や関係を持つ他者との生活や学びを通し、触れ合う人間体験を多く持つことによって他者と生きる実感が蓄積され、対人感情の火種が燃え始めるであろうとし、自己や他者への認識や感情を幼い日から生き生きと発達させることが、生きる力の火種ではないかと述べている。

人が生きていく上において自分の人生に自分なりに意味や目標を見出していることや、自己の存在そのものに価値を見出すことができることは、人生を前向きに積極的に生き、日々の生活を充実して生きることにつながるものと思われる。Frankl (1952,1955,1969) の実存分析理論に基づき、精神的健康の側面に焦点を当てて作成された尺度「実存的生活意識インベ

ントリー」を独自に開発し、青年期から老年期を対象にした研究がなされている(高井,1991,1994)。その結果、決断性・責任性・独自性、自己課題性・自己超越性、意味志向性・苦悩能力、自己の存在価値の全領域において女性の40代から50代にかけて有意な得点上昇が見られ、従来、空の巣症候群が取り沙汰されていた中年期女性の様相とは反して、人生を前向きに積極的に逞しく生きる中年期女性(特に50代)の様相が特徴的であったという結果が得られている。

本研究においては尺度の再検討を行い、前回調査との比較検討を含め、新たな視点をも加えて、Franklの実存分析理論をベースに精神的健康の視点からの人々の生き方態度の発達の変化を探ることとする。新たな視点として、自己受容と自尊感情(self-esteem)を加えることにする。

平石(1990)は健康な自己の確立には、自己表明や対人的積極性および他者受容等と共に、自己実現的態度や自己受容・自己信頼感が関連することを指摘している。また、宮沢(1987)は従来の自己受容性研究を整理し、自己受容性は自己を冷静に認識し、自己を肯定的に捉えることであるとし、自己の長所や短所などを認識することが必要であるとしている。同時にその認識が「だから自分はダメな人間だ」という評価によって投げ出すのではなく、「それでも自分は人間として価値ある存在であり、現在の自分を大切に自分を信頼している」という自己肯定的な受け入れとなることであるとしている。中村・板津(1988)によれば、自己受容している人は、豊かな自己理解、自己の内面的な安定性、適度な自信を持ち、他者を尊重し、円滑な対人関係をとることができるなどの特徴があるとしている。さらに、生き方意識に関わる領域では、自己の能力や努力を強調する傾向の人は、運やチャンスを強調する傾向の人よりも自分自身を肯定的に受容しており、自己を信頼できるということが行動規範を自分自身に置くことに作用するという知見も得られている。これら一連の研究は、自己受容と自尊感情(self-esteem)との関連は密接なものがあり、それらが他者との関わりの中で生きる人々の生き方態度にも関わってくるものであることを示唆するものと言えよう。更に、これらの視点に加えて、女性をフルタイムで仕事を持つ有職女性群と主婦群とに分けての比較検討をも含めることにする。

2. 方法

(1) 調査対象者

大学生および成人男女(会社員、公務員、主婦など)であり、有効回答総計1695名である。

内訳は、大学生285名(M 118, F 167)平均年齢20.9歳、大学生を除く20代345名(M 128, F 217)25.5歳、30代271名(M 130, F 141)34.0歳、40代318名(M 112, F 206)44.9歳、50代183名(M 56, F 127)53.9歳、60代202名(M 93, F 109)64.3歳、70代以上91名(M 50, F 41)73.7歳である。上記のうち有職女性と主婦の人数内訳をTable 1に示した。

調査時期：1996年10月～11月。

Table 1 有職女性と主婦の人数(既婚・未婚・子供の有無)内訳

		20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
有職	N	189	86	93	53	8	0
		既23 未166	既31 未55	既54 未39	既45 未8	既8 未0	
既婚	子供あり	9(4.8%)	19(22.1%)	49(52.7%)	41(77.4%)	7(87.5%)	
	子供なし	14(7.4%)	12(14.0%)	5(5.4%)	4(7.5%)	1(12.5%)	
	未婚	166(87.8%)	55(63.9%)	39(41.9%)	8(15.1%)	0	
主婦	N	28	55	113	74	101	41
主婦	子供あり	9(32.1%)	48(87.3%)	109(96.5%)	71(95.9%)	93(92.1%)	37(90.2%)
	子供なし	19(67.9%)	7(12.7%)	4(3.5%)	3(4.1%)	8(7.9%)	4(9.8%)

(2) 調査実施の手続き

質問紙は学生、社会人、主婦の友人や知人に大学や各職場、近隣などにおける配布・回収を依頼した。また、本研究において重視する視点は、主として人生を前向きに積極的に生きる人々の生き方態度であるため、老年期に関しては老人大学に質問紙の配布・回収を依頼し、協力を得た(老人大学にて有効回答176部)。

(3) 調査尺度

①実存的生き方態度インベントリー (EAL: Existential Attitude toward Life Inventory) : 実存的生活意識インベントリー (高井,1991,1994) の改訂版で、35項目よりなる5件法尺度。得点化は「全く当てはまらない (1点)」から「よく当てはまる (5点)」である。②PIL(Crumbaugh & Maholick,1964)の態度スケール: 岡堂 (1993) による改訂版を用いた。20項目、7件法尺度、得点化は1点から7点である。「人生にはっきりとした使命と目的を見出している。非常にはっきりした目標や計画がある。ふだん元気一杯ではりきっている。毎日の生活に大きな喜びを見出し満足している」のように、主にどの程度人生に生きる意味や目的を見出し、活気や充実感に満ちて生活しているかといったことを問うものである。③自己受容尺度: 宮沢 (1988) による4件法尺度 (1点~4点) であり、本研究においてはLスケールを除く27項目の合成得点を用いた。「自分の性格を知っている」といった“自己理解”、「今の自分を大切にしたい」といった“自己承認”、「私は価値のない人間である(逆転)」といった“自己価値”、「将来何が起ころうと自分なりにやっていける」といった“自己信頼”の4側面を含む尺度である。④自尊感情尺度 (Rosenberg,1965) : 山本・松井・山成 (1982) が邦訳したものを5件法で用いた (得点化は1点~5点)。「だいたいにおいて自分に満足している。自分に対して肯定的である。自分に自信がある」といった10項目尺度である。

3. 結果

実存的生き方態度インベントリー (EAL: Existential Attitude toward Life Inventory)

(1) 因子分析の結果

「実存的生き方意識インベントリー (50項目)」(高井,1991,1994)から、下位尺度の項目内容の再検討を行い、18項目を削除し、新たに3項目を追加した計35項目を用い、男女を合わ

Table 2 実存的生き方態度インベントリーの因子パターン行列 (プロマックス回転後)

No	項 目	F ₁	F ₂	F ₃	F ₄
決 断 性 ・ 責 任 性 ・ 独 自 性	10. 私は直面する様々な問題に対して、どのように対処するかを自分で決めることができる。	.725	.126	.002	-.174
	20. 私は人からどう思われようと、自分の感じ方や考え方を大切にしたい生き方をしている。	.631	.001	.004	.018
	2. 私はたとえ人から非難されても、自分が正しいと思うことは主張する。	.618	-.129	.016	.010
	13. 私は自分なりの価値観や良心に従って物事を考え、行動を決定している。	.569	.121	-.066	.013
	16. 私は必要ならば、権威に対してでも抵抗することができる。	.565	-.138	.104	.050
	6. 私は自分の生き方は自分で決めることができる。	.565	.025	.208	-.226
	35. 私は自分の行為の結果がたとえ悪くても、その責任を自分でとることができる。	.562	.245	-.180	.091
	27. 私は孤独を覚悟してでも、自分の信念に従って生きたいと思う。	.547	-.138	-.044	.241
	30. 私は人生を自分の意志と決断によって生きていると感じている。	.498	.068	.188	-.106
	7. 私はたとえつらくても、自分が直面すべき自分自身の問題から逃げることはしたくない。	.490	.011	-.025	.214
自 己 の 存 在 価 値	14. 私は周囲の人にとって何らかの役に立っていると感じている。	-.003	.790	-.058	.065
	9. 私は周囲の人たちにとって必要な存在であると思う。	-.062	.781	-.049	.057
	4. 私は毎日の生活の中で、自分の役割を自分なりによく果たしていると思う。	.120	.605	.017	-.087
	19. 私は生きている価値のある人間であると思う。	-.071	.551	.071	.102
	23. 私には自分が大切に思う人、または、自分を大切に思ってくれる人がいる。	-.066	.440	-.005	.109
	24. 私は自分のなすべき仕事や役割は責任をもってやりとげる。	.300	.408	-.148	.077
	32. 私は、あるもののために、または、ある人のために生きていると言える対象がある。	-.021	.354	.142	.105
自 己 課 題 性	8. 私はいつも、なにかの課題に取り組んでいる。	-.013	-.095	.760	.089
	11. 私には目指す目標がある。	-.009	-.137	.734	.086
	15. 私はある目標を達成したなら、すぐ次の新たな目標に向かっていく。	.059	-.017	.691	.015
	22. 私は自分のなすべき課題や目標を、自分から進んで見つけようとする。	.065	-.112	.651	.200
	5. 私は自分の能力や可能性を生かした生き方をしていると思う。	.048	.264	.585	-.164
	31. 私は仕事や家庭や社会的活動や趣味など、自分が打ち込んでいるものがある。	.035	.238	.547	-.170
	1. 私は自分の人生を充実したものにする努力をしている。	-.011	.068	.513	.156
	34. 私はいつも、ものごとに意欲的に取り組んでいる。	.093	.200	.394	.149
18. 私は自分の仕事に対して、やりがいを感じている。	-.005	.342	.391	-.024	
26. 私は自分の人生に対して、自分なりに意味を見出している。	.029	.188	.370	.244	
意 味 志 向 性	25. 私は社会や他の人のために役立つことをすることに、喜びや生きがいを感じる。	-.126	.268	-.071	.677
	3. 私はなにか役立つことをしたいと思う。	-.106	.099	-.025	.652
	21. 私は自分の苦しみや悩みの中にも、意味を見出そうとしている。	.057	-.082	.123	.617
	12. 私はいかなる運命や境遇におかれても、そこに生きる意味を見出すことに努めたいと思う。	.163	-.016	.121	.495
	17. 私はたとえ苦しくても、自分にとって意味がある生き方をしたい。	.351	-.158	.054	.469
	33. 私は生きていく上で味わうつらい経験をも自分の成長の糧にしている。	.119	.110	.089	.438
	28. 私は人との関わりによって、自分自身というものを深く知ることができると思う。	-.057	.154	.006	.420
29. 私は人生において、自分なりの使命感を感じている。	-.025	.242	.234	.358	
因子間相関行列		F ₁	F ₂	F ₃	
	F ₂	.515			
	F ₃	.675	.604		
	F ₄	.612	.560	.709	

せた有効回答全調査対象者1695名について最尤法による因子分析（プロマックス回転）を行った。その結果、統一的解釈が可能な4因子解を妥当とした(Table 2)。4因子による累積寄与率は43.77%であった。得点化は因子負荷量の絶対値が .350以上のものを採用することにし、35項目すべてを得点化の対象とした。実存的生き方意識インベントリーの因子分析結果（得

点化は46項目)と比較すると、2項目に因子間移動が見られたことを除き、各因子ごとのまとまりに変化は見られなかった。

第1因子は「自律性・主体性的側面：決断性・責任性・独自性」、第2因子は「自己の存在価値」、第3因子は「自己課題性」、第4因子は「意味志向性」と命名し、インベントリー名を「実存的生き方態度インベントリー (Existential Attitude toward Life Inventory：略記はEAL)」と改めた。また、因子の命名に関しては、第2因子を除いてFranklの実存分析理論に基づいているが、旧尺度の因子名に若干の変更を加えた。また、PILと同じくFranklの理論に基づいて作成されたEALの独自性は、両尺度の項目を合わせたものに対して行った因子分析 (Varimax回転) の結果得られた5因子が、ほぼ一次的尺度と見なしてよいであろうとされているPIL(佐藤他,1990)1因子と、EALの4下位尺度に相当する4因子にほぼ分かれていることが確認されている。

(2) EALの信頼性

EALの内的整合性信頼性を調べるために、4つの下位尺度ごとの信頼性をCronbachの α 係数によって求めたところ、第1下位尺度 .852、第2下位尺度 .802、第3下位尺度 .898、第4下位尺度 .850であった。いずれも高い数値が得られており、各下位尺度の内的一貫性は十分に保たれていると言えよう。

(3) 実存的生き方態度の発達の变化

Table 3 年齢段階別の実存的生き方態度インベントリー下位尺度得点の平均値 (SD)

		大学生	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
第1下位尺度	男性	38.57 (5.91)	37.61 (7.58)	36.70 (5.58)	38.19 (6.91)	39.48 (6.11)	40.73 (5.96)	42.20 (6.63)
決断性・責任性・独自性	女性	35.68 (6.04)	34.66 (6.16)	35.31 (6.18)	<<37.66 (5.93)	<<40.00 (6.62)	<<42.37 (5.65)	43.15 (5.45)
	性差	***	***					
第2下位尺度	男性	24.72 (5.10)	25.39 (5.57)	< 26.62 (4.29)	27.46 (4.32)	28.34 (3.70)	28.81 (3.80)	28.60 (4.27)
自己の存在価値	女性	25.31 (4.05)	26.00 (3.83)	<<<27.59 (4.45)	<<29.05 (3.97)	<<30.29 (3.17)	30.51 (3.84)	31.20 (3.98)
	男女差				**	**	**	**
	男女差	25.06 (4.52)	< 25.77 (4.56)	<<<27.12 (4.39)	<<<28.49 (4.16)	<<29.69 (3.45)	29.72 (3.90)	29.77 (4.32)
第3下位尺度	男性	36.09 (7.49)	> 34.09 (8.63)	33.72 (7.01)	< 36.19 (8.16)	37.84 (7.87)	40.24 (6.44)	40.76 (6.75)
自己課題性	女性	34.68 (7.55)	>>32.19 (7.17)	<<34.41 (7.78)	35.23 (7.90)	<<<39.44 (6.91)	<<42.54 (6.23)	42.22 (5.95)
	性差		*				*	
第4下位尺度	男性	30.62 (4.87)	> 28.98 (6.60)	29.12 (5.35)	30.01 (6.26)	31.30 (5.34)	< 33.36 (4.96)	33.54 (5.10)
意味志向性	女性	30.61 (4.71)	> 29.36 (4.98)	29.91 (5.70)	< 31.06 (5.53)	<<<33.35 (4.89)	<<<36.13 (3.62)	35.78 (4.19)
	男女差					*	***	*
	男女差	30.61 (4.77)	>>29.22 (5.63)	29.53 (5.54)	<<30.69 (5.81)	<<<32.72 (5.10)	<<<34.85 (4.50)	34.55 (4.82)

*** (<<<) p<.001 ** (<<) p<.01 * (<) p<.05

大学生から70代以上の、計7つの年齢群による年齢段階別の差、および性差の検討を行った (Table 3, Fig. 1, 1項目当たりの得点平均値に換算した値をグラフ化)。EALの尺度得点について、年齢と性を2要因とする分散分析を行った結果、第1下位尺度と第3下位尺度は交互作用が有意であった (第1下位尺度： $F_{(6,1681)}=4.72, p<.001$, 第3下位尺度： $F_{(6,1681)}=2.81, p<.05$)。交互作用が有意でなかった第2下位尺度は年齢による主効果 ($F_{(6,1681)}=45.99$) と性による主効果 ($F_{(6,1681)}=38.63$) がそれぞれ0.1%水準で有意であった。また、第4下位尺度も年齢による主効果 ($F_{(6,1681)}=36.55$) と性による主効果 ($F_{(6,1681)}=21.35$) がそれぞれ0.1%水準で有意であった。

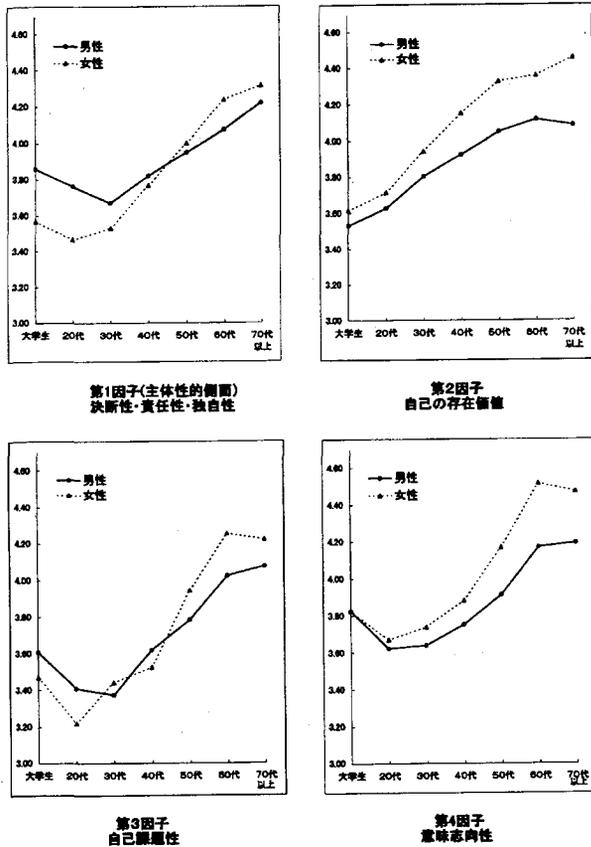


Fig1 実存的生き方態度インベントリー(男女比較)

次に、交互作用が有意であった第1下位尺度（主体性的側面：決断性・責任性・独自性）と第3下位尺度（自己課題性）について、各年齢段階別の平均値について多重比較（LSD法）を行った結果、男女はほぼ同じ様な傾向を示していた。つまり、どちらも男性は30代まで得点が減少し、40代以降すべての年齢群において上昇する傾向にある。一方、女性は大学生から20代にかけて得点が減少するが、30代以降すべての年齢群（自己課題性の70代以上を除く）において上昇する傾向が見られる。また、両下位尺度とも50代で男女の得点が逆転し、50代以降すべての年齢群において（自己課題性の60代を除いて）性差はないものの、女性の得点が男性の得点を上回ることが示されている。“主体性的側面”は女性の30代から60代にかけて各年齢群間に1%水準での有意差が見られた。

“自己課題性”は男性において、大学生から20代、30代から40代にかけてそれぞれ5%水準での有意差が見られた。また女性では、大学生から30代にかけてそれぞれ1%水準での有意差が見られ、40代から50代にかけては0.1%水準で、50代から60代にかけては1%水準での有意差が見られた。

また、性差に関しては、主体性的側面の大学生と20代において、それぞれ男性の方が女性よりも0.1%水準で有意に得点が高い。自己課題性では20代において男性の方が女性よりも5%水準で、60代においては逆に女性の方が男性よりも5%水準で有意に得点が高くなっている。

次に、交互作用が見られなかった第2下位尺度（自己の存在価値）と第4下位尺度（意味志向性）の年齢の主効果について多重比較（LSD法）を行った。その結果、自己の存在価値の大学生から20代にかけては5%水準で、20代から40代にかけてはそれぞれ0.1%水準で、40代から50代にかけては1%水準での有意差が見られた。意味志向性については、大学生から20代にかけて、また30代から40代にかけてそれぞれ1%水準で、40代から60代にかけてそれ

ぞれ0.1%水準での有意差が見られた。また、性の主効果については両下位尺度ごとに平均を求めると、自己の存在価値の女性の平均(28.56)が男性の平均(27.13)よりも有意に大きく、また、意味志向性の女性の平均(32.31)が男性の平均(30.99)よりも有意に大きいことが見出された。

(4) EALと他の尺度との相関

EALと他の尺度との関連を検討するに当たり、全年齢群を込みにした尺度間相関 (Pearsonの相関係数) の結果をTable 4 に示した。PILはEALの「自己課題性」との間に強い正の相関があり、「自己の存在価値」を初めとして、「意味志向性」や「決断性・責任性・独自性」との間にも中程度の正の相関が見られた。また、EALの4下位領域は自己受容や自尊感情とも正の関連が見出されているが、自己受容や自尊感情との間に一番高い相関を示しているのは「自己の存在価値」であった。

Table 4 実存的生き方態度インベントリーと3尺度との相関

	決断性 責任性・独自性	自己の 存在価値	自己課題性	意味志向性
PIL	.528**	.640**	.709**	.579**
自尊感情	.428**	.585**	.467**	.357**
自己受容	.535**	.602**	.571**	.466**

** p<.01

(5) 有職女性群と主婦群の比較

女性をフルタイムで仕事を持つ有職女性群と主婦群 (パートを含む) とに分けて検討を行った (但し、人数が少数およびゼロである60代と70代以上の有職女性を比較の対象から省くことにする)。年齢段階別の発達の变化、および2群差について検討した結果がTable 5, Fig. 2 であるが、有職女性と主婦との得点推移と、男性と女性を比較した場合の得点推移の傾向にいくつかの特徴が見られる。

Table 5 実存的生き方態度インベントリーの有職女性と主婦の2群比較

	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
第1下位尺度 決断性・責任性・独自性	有職 M(SD) 34.44 (6.10) 主婦 M(SD) 36.14 (6.45) 2群差	35.74 (5.89) 34.64 (6.60)	<< 38.16 (6.04) << 37.25 (5.82)	39.36 (6.81) <<< 40.46 (6.48)	<< 43.63 (6.98) 42.27 (5.56)	43.15 (5.45)
第2下位尺度 自己の存在価値	有職 M(SD) 25.79 (3.77) 主婦 M(SD) 27.39 (4.02) 2群差 *	< 27.07 (4.00) 28.40 (5.01) *	< 28.40 (4.25) 29.58 (3.65) *	29.58 (3.24) < 30.80 (3.03)	31.00 (3.77) 30.47 (3.86)	31.20 (3.98)
第3下位尺度 自己課題性	有職 M(SD) 31.96 (7.16) 主婦 M(SD) 33.79 (7.13) 2群差	< 34.26 (7.51) 34.65 (8.25)	35.12 (7.48) 35.33 (8.25)	<< 39.47 (6.67) <<< 39.42 (7.11)	<< 44.75 (4.20) 42.37 (6.34)	42.22 (5.95)
第4下位尺度 意味志向性	有職 M(SD) 29.24 (5.05) 主婦 M(SD) 30.21 (4.45) 2群差	29.47 (5.56) 30.60 (5.89)	30.52 (5.73) 31.51 (5.33)	<< 32.98 (4.78) << 33.61 (4.97)	< 37.00 (3.89) << 36.06 (3.61)	35.78 (4.19)

(<<<) p<.001, (<<) p<.01, * (<) p<.05

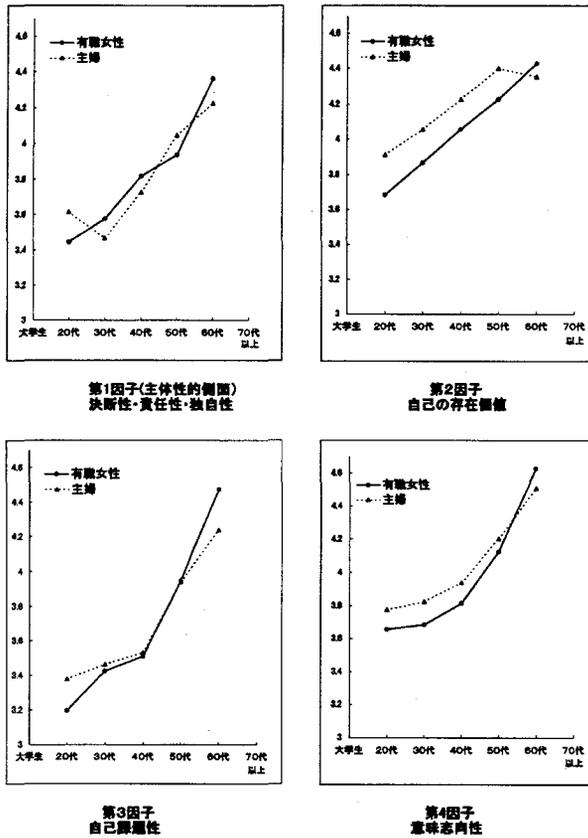


Fig.2 実存的生き方態度インベントリー
(有職女性と主婦との比較)

得点推移の傾向に、フルタイムで働く有職女性と男性の共通点が見られる。つまり、主婦と比較した場合の有職女性の得点傾向（第1下位尺度の場合は、30代、40代においては主婦よりも高く、50代で逆転。第2、第4下位尺度の場合、20代から50代において主婦よりも低いといった得点傾向）が、男女を比較した場合の男性の得点と類似した傾向を示している。有意差はないものの主体性的側面の生き方態度においては、男性同様、有職女性の方が主婦よりも得点が高い傾向にあったことも前回調査と同様の結果であった。

4. 考察

「いつも何かの課題に取り組んでおり、また自分のなすべき課題や目標を自分から進んで見つけようとし、自分の能力や可能性を生かした生き方をし、人生を充実させる努力をしている」といった“自己課題性”を持っていることや、「自分が周囲の人にとって必要な存在であることや、日常生活において自分の役割を自分なりに果たしているという自覚、或いは、あるものために、またはある人のために生きていると言える対象がある」といった“自己

2群差が見られたのは“自己の存在価値”のみであり、20代、30代、40代において主婦群の方が有職女性群よりも有意に得点が高いことが示されている（この結果は前回調査[高井,1991]でも40代を除いて同じ結果が得られていた）。男女比較においては、女性の方が男性よりも自己の存在価値意識が強いことが示されていたが、その女性の中では主婦の方が、男性同様フルタイムで仕事を持つ有職女性よりもその意識を強く自覚していることが分かる。

また、2群比較における有意差は見られなかったので言及するには及ばないのではあるが、4下位尺度における男女及び女性2群の得点推移を比較した場合、その傾向を大きく捉えると、決断性・責任性・独自性の30代から50代、自己の存在価値および意味志向性の20代から50代の

の存在価値”意識を強く自覚できていることは、人生に意味や目的を見出し、活気や充実感に満ちて生活できていること (PILが測定するもの) と、強い関連があることが示された。Frankl(1947)はアウシュビッツの極限状況において、人に生きる気力を奮い立たせるものとして未来への希望を失わないことを述べているが、その希望を持つことを可能にする要因の一つとして、愛する者の存在、或いはなすべき課題の存在を挙げている。他者との関わりの中で生きる人間存在にとって、自分にとって重要な他者の存在や他者との関係のあり方が、自己課題性と共に、日常生活における喜びや充実感に通じる重要な要因となることを示唆する結果と言えよう。

さらに、「自分が何か役に立つことをしたいと願い、社会や他者のために役立つことに喜びや生きがいを感じたり、自分の苦しみや悩みの中に、また、どんな運命や境遇の中にも意味を見出そうとしたり、自分にとって意味ある生き方をしたい」といった“意味志向的”な生き方態度や、「自分が直面する問題に対する対処、或いは自分の生き方を自分で決定できたり、自分の信念や自分なりの価値観や良心に従って物事を考え、自分の行為の結果に対する責任も取ることができる」といった“自律的・主体的：決断性・責任性・独自性”な生き方態度もまた、人生に意味や目標を持てることに通じるものであることが窺える。

また、EALが測定する生き方態度領域と自尊感情や自己受容との関連からは、決断性・責任性・独自性、自己の存在価値、自己課題性、意味志向性を強く持っている人は、自分に対してほぼ満足できており、自分に対して肯定的であり、自信を持って生きることができるといった「自尊感情」を強く持つことができている、「自己を受容できる」傾向にあることも示されている。EALの4下位尺度の中で自尊感情と自己受容との間に特に関連が見られたのは“自己の存在価値”意識であったが、自己の存在価値を自覚できていることは、自尊感情や自己受容の度合いを高める重要な要因になっていると言えよう。板津(1992)は自己受容と生き方との関連から、自分自身を否定的に捉えることで自分自身を縛り、本来的な自然さや自己の可能性までも自ら抑制してしまい、このことが生きる姿勢や意欲の欠如となってあらわれるのではないかとしている。本研究結果からも、EALが測定する自律性・主体性領域、自己課題性、意味志向的生き方態度の強さと自己受容との関連が示されたわけであるが、同時に自己の存在価値意識を自覚できていることもまた自己受容に大きな関連を持つものであることが明らかにされた。

EALの生き方態度領域の発達の变化を検討することにする。“自律性・主体性的側面：決断性・責任性・独自性”領域、および“自己課題性”領域では、大学生、20代においては男性の方が女性よりもこれら2領域の生き方態度を有意に強く持っていた。しかしその後、30代、40代になるにつれ男女の得点差は縮まり、50代以降男女が逆転し、自己課題性の60代を除いて性差はないものの女性の得点が男性を上回るようになり、女性はこれらの生き方態度を加齢に伴って強めていく様子が窺えた。

ここでEALと旧尺度を用いて調査した結果の比較を含めて検討していくことにする。両尺度は得点化の項目数が異なるので厳密には比較することは出来ないのであるが、測定内容はほぼ同じであるので、特徴を大きく捉える上での比較は可能であると思われる。自律性・主体性領域において、40代辺りまでは(性差のない年齢群もあるのだが)男性の方が女性より

もこれらの生き方態度を強く持っている傾向が見られたという結果は1990年度に行った前回調査（高井,1991,1994）と同様の結果である。異なる点としては、1990年度調査では、60代以上の男性を除いて20代以降の男女共に加齢に伴って得点が上昇していたが、本研究においては大学生から20代、30代にかけての男性の得点が減少しており、同じく女性の得点には伸びの縮小が見られ、60代以降の男性の得点は逆に上昇しているといった点が挙げられる。自己課題性領域では、50代以降の男女の傾向はほぼ同じであるが、前回調査では40代までは男女がほぼ同じ得点を示していたが、今回調査においては40代までの男女の得点に開きが見られ、20代では性差が見られた。男性においては主体性的側面と同様、大学生から20代、30代にかけて得点が減少している。女性は20代以降、有意な得点上昇を示す年齢群間も前回よりも多く、60代においては性差が見られるほどに課題性を強めていた。

また、“自己の存在価値”意識は1990年度調査と同様、全年齢群を通じて女性の方が男性よりも得点が高く、また男女共に20代から30代にかけて有意な得点の上昇を見せている。この30代の男女の得点の有意な上昇という結果も前回調査と同様であり、人々が生きるそれぞれの生活世界において“自己の存在価値”下位尺度が測定する意識領域を自覚し始めるのは、男女共に30代頃からという様子が窺える。女性はその後50代まで有意な意識の高まりを見せ、全年齢群を通じて得点は上昇し続けている。前回調査では男女共に60代以上において得点が減少していたのだが、本研究においては70代以上の男性を除いて得点が上昇していること、及び性差も30代のみに見られた前回に比して、今回は40代以降すべての年齢群において見られたことも特徴的であった。

さらに、“意味志向性”領域でも前回調査と同様、女性の方が男性よりもこれらの生き方態度が強く、今回調査では50代以降の中年期後半、老年期において性差が見られたことが特徴的であった。性差以外で前回と異なる点は、女性の40代から50代にかけてのみ見られた有意差が、本研究においては30代から60代にかけての広範囲の年齢群においても年齢群間の有意差が見られ、しかも男性の50代から60代にかけても有意な得点上昇が見られたことは今回調査の特徴と言えよう。

以上をまとめるならば、EALが測定する実存的生き方態度領域も1990年度調査と同様、加齢に伴って強まっていくことが示された。本研究結果において特徴的であったことは、1990年度調査に比して有意差のあるものが多く見られ、各年齢群間の発達的变化の度合いや性差がより顕著に表れていたことである。女性においては、EALの4下位尺度すべての領域における40代から50代にかけての有意な得点上昇は前回と同様であったが、下位尺度によっては前回見られなかった30代から40代、50代から60代にかけて有意差が示されていた。特に、50代から60代にかけて有意差が見られたものが3下位尺度あったことが印象的であった。また、性差が見られた年齢群も前回よりも多く、前回調査では青年期・成人前期において性差が見られる傾向にあったが、本研究においては、中年期以降、特に60代以降の老年期における女性が男性よりも有意に得点が高いものが見られ、老年期を積極的に前向きに生きている女性の姿が窺えたことが特徴的であった。また、自己の存在価値意識や、他者に役立つ喜び意識も含まれる意味志向性領域では、女性の方が男性よりもこれらの生き方態度を強く持っていることが示されていたが、これらの結果は、従来の研究にもあるように、女性にとっての

“他者との関わり領域”の重要性を改めて示唆する結果と言えよう。

しかし、有職女性群と主婦群比較においては、EALの3領域において有職女性は男性と類似した傾向を示し、他者との関わりの中で強く意識される自己の存在価値領域においては主婦群の方が有職女性群よりもこれらの意識を強く持っていることが示された。仕事をもち子供を保育園に預けている母親と、家庭児の母親との比較において、家庭児の母親の方が、家事に対する充足感と共に、夫婦間や家族、友人を含む人間関係に対する充足感を強く持っていることが示されている(樋口他,1984)。また、フルタイムで仕事をもちながら子育てもしているといった複数役割を持つ成人期女性が、キャリアに自信があり能力もある女性ではあっても、社会や自らの母親の生き方の中に顕在する伝統的価値観や、女性の発達過程に特有の他者との関係性を重視する自己観(ex. connected self)などによって内的摩擦を起こしており、罪悪感を生じているとも言われている(前川他,1996)。本研究における有職女性には未婚者も含まれるため、これらの見解が即当てはまるわけではないが、関連は大いにあると言えよう。

以上に概観してきたように、再検討を行ったEALを用いた本研究において、調査対象や調査年度が異なっても同様の傾向が見られた点が多く、さらにそれに付随して新たな特徴をも捉えることができた。敢えて言うならば、前回調査の特徴が50代の中年期女性の人生を前向きに生きる積極的な生き方態度であるとすれば、今回調査の特徴は40代以降の中年期、老年期を生きる女性のそれであると言えよう。

40代、50代の中年期女性が自律性・主体性領域を有意に強めていく背景には、生活者として生きる自己に対する自信というものが次第に深まってくることによるのではないかと考えられる。中年期を対象にした「自分に対する自信」に関する自由記述分析から、自信の大きな要因として男女共に「自己の有能感」や、「自己の能力が他者から評価されること」等が挙げられている(高井,1998a)。男性の場合、女性同様自己の有能感に根差すのではあるが、結婚を契機に家族に対する責任や仕事に対する責任など、生きる上での様々な「責任を負う自己」を自覚するところからも自信が生まれる様子が窺える。女性の場合は「主体性や自立性」領域を初めとして「結婚生活」「子育て」「母や妻、主婦としての役割」も主たる要因となっている。更に「困難を乗り越えてきた経験」や、長年の人生経験を経た結果「人生や自己に対して達観し、自分なりの信念や見解が持て、無駄な力を抜いて、ありのままの自己で生きることができるようになったこと」等も自信につながっている様子が窺える。文章完成法および半構成的面接による中年期男女の心理的变化を分析した研究(岡本,1985)によると、否定的変化もあるものの、40代の意識変化として自己確信や有能感の高まりが見られ、地域社会の中で認められ根づいてきたという意識や定住による安定感などは、40代になって自我同一性の確立感や安定感が増してきたことを示すものであるとしている。自我同一性の視点から捉えたこれら40代の特徴は、「自信」や本稿における視点から探った結果にも通じるものであると言えよう。

また、生き方のスタイルに関する研究(落合,1979)において、克服型(困難な道を選ぶ者)は生きがい強く感じており、失敗を恐れず人生にやる気に満ちて立ち向かい、自分自身に正直に忠実に生きているという実感をもっているが、安全型(容易な道を選ぶ者)は過去の自分の生き方に納得していない者が多く、外見を気にする者が多いことが示されている。克服型

は自分自身に価値基準を置き、安全型は世間に価値基準を置いているとしている。これは大学生を対象にした研究であるが、本研究結果や中年期の自信の自由記述から得られた結果にも関連するものである。自己の有能感のみならず、努力経験や人生の困難を克服した経験等が自信につながり、EALが測定する自律性・主体性的側面の生き方態度を強めていくことができるのであろう。悩みや苦しみの中にも意味を見出していこうとする“意味志向的”な生き方や、常に課題に取り組み、目標に向かい、人生を充実させる努力をしようとする“自己課題的”な生き方、自分の感じ方や考え方を大切にし、孤独を覚悟してでも自分の信念や価値観に従って生きようとする“決断性・責任性・独自性”を持った生き方をしようとする人、また“自己の存在価値”を自覚できている人は、充実感に満ちて生活できており、自己を受容でき、自尊感情も持つことができていた。男性は仕事や家族との関わりの中で「責任」というものをより強く感じながら生きており、女性は男性よりもより強く「他者との関わり」領域の中から生きる上での自己に対する自信を次第に身につけていくものであると思われる。

山本(1987)は「男性性に主体的な個としての存在様式が、女性性に他者との他融合的結びつきを通じた存在の在り方が強調されているが、それらは一人の人間の中に在る二つの存在原理であり、その統合が目指されるべきものであると見なされている」と述べている。精神的健康の視点から行なった本研究において、人生を積極的に前向きに生きる中年期、老年期の女性の姿が特徴的であったという結果が得られた。本研究の調査対象者は精神的健康度の比較的高い人であろうと推察されるが、本研究結果において、現代を生きる女性が、中年期辺りから、男性性に強調される主体性的側面と、女性性に強調されている他者との親和性的側面との存在原理をうまく統合していく様子が示されているように思われる。そこには、老年期においてもますます強められていた、役割意識にも関連する“自己の存在価値”意識(高井,1998b)というものが大きく影響を及ぼしているのではないかと思われる。同時に、生きていく上において直面せざるを得ない悩みや苦しみを自分も自分を成長させる機会として前向きに受け取る“意味志向的”な姿勢の中からも自信の一端が生じ、そのことが更に人生を前向きに積極的に生きていくことにつながるのではないだろうか。

本研究において60代以上を老年期として扱ったが、女性のみならず老年期を生きる男性の得点にも上昇が見られた。老年期というstageは、そこに至るまでの生き方態度の個人差が大きく現れてくるstageと言えるだろう。比較的健康度の高い人の場合、老年期と言えどもまだまだ現役といった感がある。人生を前向きに生きる姿勢や意欲が十分にある様子が窺えた。老年期にあって人生を前向きに積極的に生きようとする人々に、その叡智を次世代のために大いに活かして頂く重要な役目もあろう。高齢化社会を迎えている日本にとって、従来の老年期観ではなく、時代の流れと共に変化している老年期について、新たに様々な側面における再考が迫られている時期であろう。

[引用文献]

- Crumbaugh, J.C. and Maholick, L.T. 1964 An Experimental Study in Existentialism: The Psychometric Approach to Frankl's Concept of Noogenic Neurosis. *Journal of Clinical Psychology*, 20, 200-207.
- Frankl, V.E. 1947 Ein Psycholog Erlebt das Konzentrationslager Österreichische Dokument zur Zeitgeschichte 1. Wien: Jugend und Volk. 霜山徳爾 (訳) 1988『夜と霧』フランクル著作集1 みすず書房.
- Frankl, V.E. 1952 Aertzliche Seelsorge. Wien: Franz Deuticke. 霜山徳爾 (訳) 1986『死と愛』フランクル著作集2 みすず書房.
- Frankl, V.E. 1955 Pathologie des Zeitgeistes - Rundfunkvorträge über Seelen Heilkunde. Wien: Franz Deuticke. 宮本忠雄 (訳) 1977『時代精神の病理』フランクル著作集3 みすず書房.
- Frankl, V.E. 1969 The will to meaning. Foundations and applications of logotherapy. New American Library. 大沢博 (訳) 1986『意味への意志』プレーン出版.
- 服部祥子 1998 「生きる力の火種を培う教育を」『朝日新聞—論壇—』1月7日
- 樋口のみみ・岡宏子・比留間敦子・白川公子・山本寛子・谷川弥生・大野澄子 1984 「精神発達と母子関係 (13)—乳児から幼児へ」『日本教育心理学会第26回総会発表論文集』310-311.
- 平石賢二 1990 「青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感から見た心理学的健康—」『教育心理学研究』38, 320-329.
- 板津裕己 1992 「生き方の研究—尺度構成と自己態度との関わりについて—」『カウンセリング研究』25(2), 21-29.
- 前川あさ美・野村法子・園田雅代・無藤清子 1996 「複数役割をもつ成人期女性の葛藤と統合のプロセス(その1)」『日本教育心理学会第38回総会発表論文集』122.
- 宮沢秀次 1987 「青年期の自己受容性の研究」『青年心理学研究』1, 2-16.
- 宮沢秀次 1988 「女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究」『教育心理学研究』36, 258-263.
- 中村昭之・板津裕己 1988 「自己受容性の研究—文献的研究と文献目録—」『駒澤社会学研究』20, 131-172.
- 落合幸子 1979 「生き方のスタイルに関する研究—人生の選択場面での選択の様式における個人差」『筑波大学心理学研究』1, 54-62.
- 岡堂哲雄監修 PIL研究会編 1993 『生きがい』河出書房新社.
- 岡本祐子 1985 「中年期の自我同一性に関する研究」『教育心理学研究』33, 295-306.
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton: Princeton University Press.
- 佐藤文子 1975 「実存心理検査—PIL」『心理検査学—心理アセスメントの基本』垣内出版, 323-343.
- 佐藤文子・山口浩・田中弘子・斎藤俊一・岡堂哲雄・千葉征慶 1990 「PIL(実存心理検査)日本版に関する基礎的研究2—1: Part-Aの項目分析—」『日本心理学会第54回大会発表論文集』125.
- 高井範子 1991 「現代人の生き方に関する—研究—実存的生活意識インベントリーの作成と年代別等の研究について—」『大阪大学人間科学部教育学専修卒業論文 (未公刊)』
- 高井範子 1994 「実存分析的視点による現代人の生き方意識の検討—実存的生活意識インベントリーの作成と成人に対する調査の実施—」『人間性心理学研究』12(1), 62-73.
- 高井範子 1998a 「自分に対する自信に関する研究—中年期の自由記述分析を通して—」『日本発達心理学会第9回大会発表論文集』228.
- 高井範子 1998b 「自己の存在価値意識に関する研究—中年期の自由記述分析を通して—」『日本教育心理学会第40回総会発表論文集』144.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』30, 64-68.
- 山本里花 1987 「後青年期の女性の自己形成過程に関する研究—人格発達の2側面— 一体性・分離性—を捉える試み」『日本教育心理学会第29回総会発表論文集』256-257.

A Study on the Developmental Process of the Attitude toward Life from the Viewpoint of an Existential Analysis

An Investigation by using the Existential Attitude toward Life Inventory

Noriko TAKAI

The purpose of this study is to examine, with the "Existential Attitude toward Life Inventory (EAL)" based on Frankl's existential analysis, how one's attitude toward life develops with age. The respondents were 1695 males and females (from 18 to 88 years old). The relationships of EAL to PIL, self-acceptance and self-esteem, were also examined. The results were as follows : (1) Four factors were isolated ("decision, responsibility, uniqueness" "self-worth" "self-imposed task" "intentionality to meaning"). In all factors, the mean scores for both males and females tended to increase with age. Especially, the mean scores of females were significantly higher for the 40-49 , 50-59, 60-69 age groups than each immediately preceding group. In "self-worth" and "intentionality to meaning" , the scores were significantly higher for females than for males. (2) "Self-imposed task" showed a significant, strong, positive correlation with PIL. People who were full of vigor and successful in finding a meaning in life strove to find self-tasks and goals in life, made efforts to live meaningful life. Especially, "self-worth" in EAL showed a significant, strong, positive correlation with PIL, self-acceptance and self-esteem. The result indicated that finding "self-worth" in life had strong positive relationships with the degrees of self-acceptance and self-esteem, and furthermore, led to finding a meaning in life and thus to an active life.